

あらずし

「あんな球、避けられるでしょ」。夏の甲子園出場をかけた京都府大会決勝戦。注目のエース対決で、強打者でもある境風学園・仁科涼馬に頭部への死球を与えた木暮東工業・権田至は、静まり返った球場でそう言い放つ。球審から故意と判断され退場となった至は、世間から大きな批判を浴びても謝罪せず、沈黙を貫いていた。一方、ボールへの恐怖心から打席に立てなくなった涼馬だったが、親友には意外な言葉で口にするのだった。二人を見守る親友、マネージャー、チームメイト、さらには球審やOB会長ら大人たち、それぞれの想いが交錯する。言葉に秘められた「真実」を追い求める青春小説。

作品の一部抜粋

境風学園と木暮東はがっぷり四つに組んで、三年生になった仁科涼馬と権田至がお互い一步も引かない投球を展開している。

だが僕の中で、涼馬が二度も負けるなどありえないことだった。去年の秋は確かにやられたが、涼馬の速球も、変化球もより磨きがかかった。全国で見ても屈指のピッチャーに成長したと思う。鼻肩目かもしれないが、権田はまだ粗削りで、投手として完成度は涼馬の方が上だと感じる。

右バッターボックスに入った涼馬は、バットを立てて構え、静かな目の色でマウンドの権田を見つめている。バッターとしても涼馬の方が上だ。権田が下位を打つのに対して、涼馬は三番打者なのだ。

権田は突っ立ったままキャッチャーの方をしばらく眺めて、無造作にモーションに入つた。振りかぶって足を上げ、素早い動作で投げおろす。

速球がインサイド胸元へ——危ない！

涼馬は仰け反って、バッターボックスから二、三步飛び出した。

おらおら、どこへ投げてんのや——強烈なヤジが飛んでいる。確かに内角も攻めないと、涼馬は打ち取れない。それはわかるが、それにしても今の一球はちょっと外れ過ぎ、ブラッシュバックというやつだ。

「こら、ちゃんと勝負せいや！ 怖いんか！」

思わず声が出た。

涼馬は表情を変えない。バッターボックスに入り直し、もう一度バットを立てる。権田の方も動揺した様子は微塵もなく、平然として見える。ボールを受け取ると、一度帽子を取って汗を拭いた。間を置かず再び振りかぶる。足が上がった。

第二球目は外角低めのストレートだった。球威のある、いいボールだ——思った瞬間、涼馬のバットが一閃し、乾いた音がした。打球はライト線の鋭いライナーだ。わつと歓声が上がると、僕も思わずよっしゃあ！ と叫びながら打球を目で追ったが、球威にやや押しされたのか、白線のわずかに外側にバウンドし、ファウルグラウンドのフェンスに当たるのが見えた。

涼馬は一塁に向けてダッシュしていたが、ちょっと天を仰ぐ仕草をして引き返す。惜しい当たりだった。だがさすがは涼馬だ。一球目にあれだけ厳しく内角を攻められても全く

腰が引けていない。終盤になって、権田のスピードにも慣れてきている感じだ。これならストライクは確実に捉えられる。

「ええぞ、ナイスバッティング！ 次はデカいのいけるぞ！」

叫ぶと、涼馬がちらと視線を上げた。スタンドにいる大勢の中の僕と目が合うことなんてもまないのに、あるか無しかの微笑みをこちらに送ってきた——ように見えた。

三球目。

権田の投球間隔は短い。それまでの二球と同じように無造作と言っている動作で、足を上げ、素早く右腕を振り下ろした。

あ——

一瞬、僕の周りのすべてが凝りついた。陽射しも、光って見えるグラウンドも、空も人道雲も色を失って、自分の背中を濡らす汗だけが急に冷えたように感じられた。

作者プロフィール

木住 鷹人（きずみ ようと） 〓ペンネーム〓

一九六三年、京都市生まれ。兵庫県在住。

立命館大学法学部卒業。

銀行を経て、現在その関連会社で勤務。



受賞コメント

最近になってようやく、挫折を含めた過去のすべてが今の私を形作ってくれていると思えるようになりました。そして、その節目節目で、いつも私を助けてくれたのは「本」だったなあと、しみじみと思い返しています。

京都が私生まれ育った街です。その京都に関わる物語を書くことは、私にとってとても楽しい作業でした。書き進めながら、これからも心の翼を細かくして、時に一杯拡げて生きること、そうすることが、まさに私を育んでくれた京都に対する、そして「本」に対する恩返しになるのではないかと考えるようになりました。

選考に関わってくださった先生・委員の方々、賞の運営に携わっておられるすべての皆様に、心から感謝申し上げます。

あらずし

京大を卒業し就職した金融機関を辞め、恋人にも別れを告げられた雄司は、偶然入った和菓子屋「洛中甘匠庵」で目にした「求む、菓子職人」という貼紙をきっかけに、和菓子の世界へと足を踏み入れる。今後一年で雄司を含む三人の中から後継者を選ぶと宣言する大将。唯一の素人である雄司は、大将に罵倒される日々を送りながらも、後継者となるべく深夜まで修行を敢行する。いよいよ後継者選考が迫るが、大将の物忘れが増えていき――挫折を味わった青年が和菓子と出合い、覚悟をもって努力しながら、人として大きく成長する姿を描いた職人小説。

作品の一部抜粋

「帰れっ」
大将が私を睨みつけ、単発の短い雷のような怒鳴り声を上げると、グラスの水がカラリと向きを変えた。

「大将、なんにも、いきなりそんな言い方ははらんでも。宮本さんは、年齢的にもまだまだこれからやないですか」

「ワシはなあ、素人に一から教えるつもりはない。そんな暇もない。それに京大出てええ銀行入ったのに、たったの一年で逃げ出す奴に、なにができるんや。平和ボケなんか、ゆとり世代なんか知らんけど、まったく情けない。悪いことは言わん、帰れっ」

悔しさを憤り、そんな感情は不思議と湧かず、ただただ全員の黒目がこちらに向いているのが恥ずかしい。普通の企業なら確実にパワハラ騒動だろう。でも、なにひとつ言い返せない。大将に纏わりつく畏怖のようなものの前では、言い返そうとする気力すら刈り取られてしまう。父の社会的地位という庇の下で、虚実混交の美辞麗句には嫌というほど慣れている。だから他人に、ここまで罵声を浴びせられるなんて思いもしなかった。

「お願いです。なんでもしめますので、とにかく働かせて下さい」

私は座布団を外して額を畳にひつつけた。神田さんの膝頭が左に見える。

「大将、来月は、お茶会の注文も例年より多いんです。バイトの智絵ちゃんだけでは、洗いもんさえ追いつきませんよ。私も烏丸のお店で、牧野さんの応援をしてあげんとあきませんのに」

私が顔だけ上げると、おかみさんは不安そうな顔でグラスの結露を親指でなぞった。

「そないに言うんやったら好きにせえ。そのかわり、宮本には洗いもんと掃除以外やらさへんからな」

「ありがとうございます」と言ったが、大将は知らん顔だった。

「それじゃあ皆さん、明日から六時半にタイムカードを押して作業場に入って下さいね。開店時間の十時になったら、販売の友希ちゃん、作業補助の智絵ちゃん、それに配達兼販売の健太郎さんを紹介しますから。友希ちゃんは京都女子大の一回生で、智絵ちゃんはご近所の新婚さん。健太郎さんは、百貨店を定年退職して働いてくれてはるの」

おかみさんの柔らかな話しぶりを聴いていると、大将のどこに惚れたのだらうと邪推したくなる。

「職人を募集した理由を説明するさかい、よう聴いとき」

腕を組んだ大将が凄む。居住まいを正したおかみさんを見て、私も同じようにした。大将は少し間を置くと、説明を始めた。

「うちの店には後継ぎがおらんや。それにワシも、もう七十七歳になる。せやさかい、今回募集した中から後継ぎを探したいと思うてるんや。向こう一年で三人を見極める。使いもんにならんか、将来性がないか、ワシが気に入らんかったら一年を待たんとクビや。三人ともあかんかったら、ワシの代でこの店はおしまいにする。それとお前ら、技を教えでもろて給料までもらえるんやさかいなあ、それなりの覚悟しとき。ほな、よろしゅう頼んだで」

そう言って大将は席を立ち、二階に消えた。
「皆さん、かんにんえ。昔気質の職人さんで、あんな言い方しかできはらへんの。これからたいへんなことが多いでしょうけど、よろしくお願いします」

作者プロフィール

高田 充(たかだ みつる)

一九七一年、大阪府生まれ。滋賀県在住。

立命館大学経済学部卒業。

現在、生活相談員(ソーシャルワーカー)として京都市内の特別養護老人ホームに勤務。

二〇二一年、小説「介護ライオン」を自費出版。



受賞コメント

匠たちによる魂の伝承を描きたくて、「一菓」という物語に思いを込めました。

優秀賞と読者選考委員賞の二つの賞を頂戴したことに感激がとまりません。

大学を卒業し約三〇年、ずっと京都でお仕事をさせていたでおります。失敗や挫折の多い人生に、こんな夢のような日が訪れようとは思いませんでした。この二つの受賞を励みに、これからも言葉を愛し、探し続けようと思います。

最後になりますが、一次選考から私の物語を読んで下さったすべての方と事務局の皆様さま、また、どんな時も私の心のそばにいて支えて下さる先輩や仲間たちに、最大の感謝を申し上げます。本当にありがとうございます。

《中高生部門 最優秀賞》 「千紫万紅、夏の暮れ。」

あらすじ

家にも学校にも居場所がない中学生の大和は、父の遺品であるカメラをきっかけにトランス女性で大学生のかずさんに出会い、少しずつ心を許していく。大和は高校生で幼馴染のひまりに恋心を抱いているが、ひまりの心の中には同級生の「ななちゃん」がいて、その「ななちゃん」には彼氏がいてー叶わない恋に悩み、「自分が何者であるか」に苦しみなながらも、裏表のないかずさんの元恋人との出会いによって、自分に素直になることの大切さに気付く、大和の心の変化や成長を描いた青春小説。

作品の一部抜粋

「この一眼、どうしたの？」

「あ、父の、遺品で」

「お父さんカメラ好きだったの？」

「たぶん。父は六年前に亡くなったので僕はよう知らんのですけど」

僕はかずさんに変な気を遣ってほしくなくて努めてなんでもないふうにして。かずさんは僕の返事に優しく「そっか」とだけ言うので、足を組みなおし、そのうえで僕の一瞬をじつくりと眺めた。

「私はカメラが専門じゃないからちよつと詳しくはわかんないけど、数年以上前のモデルだから、現行モデルよりもどうしても性能が落ちちゃうのは、もう仕方がないよね。家にパソコン、ある？」

「あんまり使ってへんから、ちよつと」

「そっかあ」

僕と会話をしながら、かずさんはカメラの電源を入れて、観察を始めた。今まで電源を入れる事しかできなかった僕には何をしているのか想像すらつかなかったけど、僕が首をかしている間にかずさんは満足いくだけの確認ができたようで、最後にカメラを眺めて、僕にカメラを返してくれた。

「うん、お父さんも、えつと、君」

「大和です」

「大和君も、綺麗に使ってたみたいだね。ちゃんと動くし、目立った傷もない。さっきも言ったように、さすがに今の最新モデルにはもちろん劣るけど」

「そうですか」

「うん。でも綺麗な写真を撮ることがすべてじゃないし。大和君が使いたいものを使って撮るのが一番いいよ」

かずさんは快活にそう言い切るとにっこりと笑った。

「一年の時の授業でね、土を使ってモデリングするのがあったんだけどさ。私それにすぐくはまっちゃって、モデリングのための素材を撮るためにカメラを始めたんだよ。写真専攻にした友達も言っていたんだけど、いろいろ技術とか、機材とか、あるみたい。でもそれよりも、写真でしか切り取れない何かの方が大事なんだって。その人にしかない視点があるからって。友達もそう言っていた。その人の覗いたレンズ越しにしか引き出せない物の側面が多分あるんだよ。それってすごく素敵だなんて私は思うんだ」

レンズ越しにしか引き出せない何か。僕はかずさんの言った言葉を口の中で繰り返してみた。僕はその音を口で転がして、それが本当ならどれほどおそろしいだろうと思った。同時に、なんて素晴らしいのだろうと思った。かずさんに渡されたカメラの機体は重くてひんやりしている。その丸いレンズ越しに見つめた世界で何ができるだろうと思った。僕にはこれを通して、いったいどれほどのものが見えるのだろうと思った。あるいは、父には――。

僕はなんだか目の前がさつと晴れたように感じた。僕の知らなかった世界がそこに広がっているのだと、そう思うとすごく、変な気分になった。

これほど長い時間黙りこくっていたにも関わらず、かずさんは僕のことを待ってくれた。僕の思考の整理が終わるまで待っていてくれた。ようやく僕がかずさんの方を見てくちを開いたとき、かずさんは先ほどと同じ穏やかな顔で僕を見てくれた。

作者プロフィール

たかだらん 〓ペンネーム〓

京都市在住。

同志社大学一年(募集開始時、高等学校三年)。



受賞コメント

この度はこのような賞に選定頂き、ありがとうございます。

京都という土地はとても魅力的な場所です。独特の空気感、見る人や視点が変わる度に違う印象を与えるし、それが時として恐ろしく感じる事も確かにあります。けれども、だからこそ京都という町はとっても魅力的なのだと思えます。そんな土地で私は育ちました。本当に好きな場所です。

それが伝わればいいな、みんなにもっとと京都を好きになってほしいな、と思ひながら、このお話を書きました。

大好きな京都を描いた作品で、このような賞を頂くことが出来て大変光栄です。今後も京都で得た全てのものを忘れないよう、両手いっぱい抱えながら精進していきたいと思ひます。

あらずし

ある理由から夏休みを祖父母の家で過ごすことになった小学生の夏彦は、祖父に誘われて登った稲荷山の頂上で不思議な少年・葉子と出会い、言葉を交わすうちに二人は打ち解けていく。ある日、京都を直撃した台風の爪痕が残る稲荷山に行くと、そこに葉子の姿はなく、代わりに夏彦に宛てた一通の手紙が。そこにはある衝撃の事実と「さよなら」の文字が綴られていた――伏見稲荷を舞台に、少年と妖狐の時を超えた友情と、大切な人を目指すことの尊さを描いたファンタジー。

作品の一部抜粋

壁沿いに置かれた休憩用の長椅子に座って、上を見上げる。

風が強いらしく、頭上で入道雲が右から左へと動いていた。

なのに、僕のまわりを通り過ぎる風は左から右へ行く。不思議だなあ、なんて思っていると、ふと山のおいが強くなって。

最後にふわり、と、隣で風が起こった。

左を見ると、長椅子に、一人の男の子が座っている。

あれ、さつきまでは誰もいなかったのに。

疑問に思って首をかしげると、その男の子はこちらを向いた。同い年くらいで、肌が白くて、瞳が黒くて宝石のよう。

見惚れる、とはこういうことを言うんだろう。

「何、見てんだよ」

その男の子はぶつきらぼうに言った。

「きれいだって、思っ」

僕は素直に伝えた。

初対面のはずなのに、するりと言葉が出てくる。もともと人見知りで、滅多に、はじめましての人とは話さないのに。

「それ、褒め言葉？」

「うん。嫌だったら、謝るよ」

男の子は、別に、と顔をそむける。

何故か彼とは、何度も出会っているような、不思議な気がした。

「ねえ、君の名前は？」

彼は言葉の真意を確かめるように、僕をにらむ。だけど、そこに真意なんてないことに気づいたのか、教えてくれた。

「葉子」

「よう、こ？」

「自分から訊いて聞いて聞き返すなよ」

今度ははつきりと一文字ずつ区切って、よ、う、こ、と言う。

「女の子みたい」

ポロリと零れた、僕の感想だった。

それを聞いた葉子の反応から、彼のことを傷つけてしまったと思う。夏彦、は男の子の

名前だから、女の子みたいと言われることはないけど、きつと言われたら傷つくだろうな。

葉子は一瞬、目を細める。

「ご、ごめ」

「いいよ。子、がつくのはたいてい女だもん」

僕の不安は、葉子の笑顔に吹き飛ばされる。

そう、葉子は、笑っていた。

「俺は、あの、緑の葉の、子供だ」

山に生い茂る木々を指差す。

「それには別に、男とか女とかない」

白い肌には黒い瞳。緑の要素なんて一切ないのに、僕は、彼にびったりの名前だと思った。

太陽へ向かって手を伸ばす、命の青さを湛えた葉。

「お前、面白いな」

作者プロフィール

幾野 旭 (いくの あさひ)

京都府在住。

京都府立南陽高等学校三年。



受賞コメント

なんかいる？ 伏見稲荷大社にはじめて訪れたときに思いました。そばにいるだけで心がじんわりと温かくなるような、優しい、人ならざる何か。

きつと私の妄想でしょうが、考えれば考えるほど、そこには何かがあった気がします。例えば、黒くて綺麗な瞳をもつ爽やかな青年だとか、かわいらしい容姿のいたずらっ子だとか……そうして生まれたのが、この物語です。

私の中に住んでいた大切な仲間たちが、文字になり、そして優秀賞という荣誉ある評価をいただきました。とても嬉しく思っています。

この京都文学賞に関わってくださった皆様と応援してくれた家族、そして物語作成に力を貸してくれた友人に、心から感謝申し上げます。ありがとうございました。

《中高生部門 奨励作》 「グッドアンドバッド」

あらすじ

近くの図書館で「不幸が説明出来るなら是非読むべき!」と書かれた看板を目にしたクルトは、一冊の本を手取る。そこには、この世界は幸世界と不幸世界に分断されていて、これらの世界をある一族が支配しているということが記されていた。本の内容を聞いた母親から、予想だにしない言葉を告げられたクルトがもう一度図書館に行くと、その本は消えていて「幸せとは何か」をテーマに、少年三人組が悪の一族に立ち向かう姿を描いた冒険小説。

作品の一部抜粋

「やっぱ、この図書館の本やないなあ。データにも有らへんし」

少しの間PCを見ていた来山さんが顔を上げて言った。今回もまた、来山さんの記憶が正しかったわけだ。けど、この図書館の本やないんやったら、なんなんやろ。他の図書館の本やったりするんやろうか。

「バーコード無い本ってことは、どっかに売られてたもんやないってことやしなあ……誰かが自分で作ったんやろか」

来山さんは本のページをペラペラ捲りながら首を傾げた。基本的に、どんな本にもバーコードというのはついてるはず。だから、ついてへんってことはなんか、特別な理由がある本ってことや。この本も、普通の本とは違うってことやろ。俄然興味がわいてきた。不思議な本やったら是非読んでみたい。

「なんかわからんけど、この本はこの図書館の本やないみたいやし、貸せへんな。もし読みたかったら、この図書館の中で読みや」

そう言われて、僕は来山さんから本を受け取った。人は多いし混んぶるけど、ここでしか読めへんのやったらここで読むしかない。幸いにも今日はこれから予定はないし、少し時間がかかっても問題はない。周りを軽く見回せば、近くに一つの椅子が空いているのが見えた。僕はその椅子に座って本を開いた。

本の中には、文章だけやなくて、イラストがいっぱい描いてあった。それに、文字はまあまあ大きくて、子供が読む児童書みたいだった。しかし、内容は昔のことが書いてある歴史書だった。けれど、世界が分けられてどうか、そういうことが書いてあるから本当のことじゃないだろう。ファンタジー小説なんやろうか。この本のジャンルは何なんだろう、と考えていたら本を読み終えていた。本はぶ厚かったけど、意外と文章自体は短くて、読了にかかる時間は短くて済んだ。

本の内容としては、この世界は、幸世界と不幸世界に分断されている、というもんやっただ。流石に簡略化しすぎやけど、物語の本筋となつたんはこの要素だったと思う。他にも、幸世界では幸せやっという感情しかなくて、不幸世界では不幸や、っていう感情しかない、ってこととか、これらの世界を支配してんのが霧乃崎家、ってところやっということが書いてあった。霧乃崎家って家は聞いたことあらへんけど、舞台になつたんは京都やし、他のことも意外と史実に基づいた感じやった。この本を作ったんが誰かはわからんけど、しっかり調べて書かしたんやな、っていうことがよう分かった。これが本当の話

だと言われても信用できてまうほどに。

「面白かったなあ……」

僕は本を静かに閉じた。なんか変な看板に惹かれて読んでみた本やっただけど、この本を選んで正解やっただけがする。しっかり作られた物語ほど、おもしろいものもない。

時計を見てみたらまだ図書館に来てから一時間くらいしかたつてへんかった。けど、来るのが遅かったからもうすぐしたら昼ご飯の時間や。僕は帰り支度をして、図書館をあとにした。

「ただいまー、今日の昼ごはん何ー?」

帰りながら歩いていたらお昼の時間ってこともあって滅茶苦茶お腹がすいてきてた。僕は料理のにおいに誘われ、台所に行ってお母さんに尋ねた。

作者プロフィール

村右衛門(むらえもん) 〓ペンネーム〓

京都府在住。

城陽市立東城陽中学校三年。



作者コメント

この度は、中高生部門・奨励作に選出していただき、誠にありがとうございます。

これまで、小説は自分の意志を表明する場と思、「好きなもの」の中でも特に大事にしてきました。小学四年生の頃から細々と小説を書き続け、中学校への入学と同じくして小説投稿サイトなどを利用するようになりました。紙からパソコンへと、小説を書く方法は変わってきましたが、ずっと好きなものをテーマに書き続けてきたつもりです。今作「グッドアンドバッド」も同様でした。なので、今作を通して奨励を頂けたことで「小説を書く」という行動自体を肯定していただいた気分です。この経験を糧に、これからも頑張っていきたいと思えます。改めて、京都文学賞に関わられた全ての方々にお礼申し上げます。

あらすじ

「私は閻魔大王になりたい」。京都に住んでいるドイツ出身の「私」は、言葉や文化の壁を前にして自然発生する様々な葛藤や違和感と「対話」しながら日常生活を送っている。だが、日本という国、人や文化を理解しようとする努力は常に誤解を生み、その誤解はまた新たな理解を生んでゆく――深く長い歴史が息づく京都での日々の生活や出来事、妻や義父母との交流を通して、自らが辿り着いた「景色」を随想的かつ内省的に描く掌編小説集。

作品の一部抜粋

窓口

複雑な瞬間。門番のような大切な役。天国に入る前に門番と話さなきゃ。門番次第で天国か地獄に入る。

大人一枚ください。

だいたいそんな言い方。大人。必要か。すぐ見えるじゃないか。一枚くださいと言ったら何も分からない観光客と間違われるかもしれない。一般の観光客と間違われることをいつも恐れている。最初の瞬間から日本語能力を見せないと観光客扱いになるかもしれない。何年も日本語を勉強している人としてあり得ないことだ。しかしながら、僕の発音は硬くて仕方ないので窓口で言葉を出しすぎたら勘違い確率も上がる。外国人の口から聞き取れない言葉があったら英語で話すかもしれない。

英語で話される時失敗したと感ずる。窓口で切符を頼む時ストレスで胃が重くなる。窓口の扱い次第気分が変わる。天国か地獄か。

そしてチラシ。いつも聞かれる。何語にしましょうか。日本語の案内状を頼むと嘘付いた気がする。当たり前。日本語のチラシを読むはずがない。しかし僕は読みたい。いつもチラシを読む方になりたかった。英語のチラシを渡される瞬間自分の失敗が感じられる。自分が足りない部分。

家で

ある時僕が義理のお父さんに質問すると彼から返事がない。彼は耳が悪い。聞き取れなかったか。僕の質問がつまらなすぎたか。彼の顔は無表情。深い問題について考え込むか。僕の質問は届かなかったか。

ある時僕が義理のお父さんに質問すると彼は黙っている。僕はその間迷っている。もう一回聞こうか。あきらめるか。そして彼は急に幸子さんの方を見て、なんと言ったかと思える。幸子さんは僕の質問を繰り返してから答える。悪い場合彼は幸子さんの方を見て話している。良い場合僕を見て話す。

義理のお父さんだけではない。幸子とぶらぶらする時に店の窓口でこのパターンだ。僕の質問の後で幸子の方を見る。翻訳くださいのように。彼はなんとというか。幸子さんもこの行動には困っている。

最近、家庭ですべての会話がうまく出来る。幸子さんは父に何回も説教をした。直接

答えてくれるようになった。本人は大変だと思っているが、一生懸命やっている。彼が疲れているときは、質問をしない方がよいと思っている。そして、一緒に沈黙する。もしかしたら、この無言の過ごし方が一番居心地よい時間なのかもしれない。もちろん、そんなときは自分を責める。理由は僕の発音が悪いからに違いない。あるいは言葉の選び方を間違ってしまったか。

でも、それは僕の問題ではなく、一般的な情性なのかもしれない。コミュニケーションは疲れる。ほとんどの人が問題を回避したい。外国人を見ると、言葉のやり取りに問題があると予想するのだ。犬やニワトリに会ったときと同じだ。お互いに会話できることを全く期待していない。正しい言葉を選んでも、発音がよくても、人には聞こえないんだ。そんな時、僕は閻魔大王になりたい。人の舌を引き抜いたりしない。煮え湯を飲ませない。耳を引っ張る。聞け！まずは聴いてみてください！

作者プロフィール

ステックミュラー アヒム

一九七七年、ドイツ生まれ。京都市在住。

現在、立命館大学でドイツ語囁託講師を務める。

二〇〇二年からドイツで詩や短編小説を発表するほか、戯曲、翻訳も手掛ける。二〇一〇年、エルゼ・ラスカー＝シューラー戯曲賞、二〇一三年、シュヴァーベン文学賞を受賞。主な作品に、小説『Magdal』(二〇〇七年)、推理小説『Nox』(二〇一〇年)、小説『Zerstreuung』(二〇一八年)、などがある。



受賞コメント

私は長い間、日本語で文章を書きたいと思っていた。同時に、自分の文章をどこに見せればいいのかわからなかった。だから、京都文学賞の募集はありがたかった。書く理由と場所ができたのだから。そうして私は一年以上、京都文学賞とともに暮らした。当初は締め切りを意識していた。応募できたことが嬉しかったし、誇らしかった。そして一次選考の結果を待つ。ノミネートから新たなモチベーションを引き出す。書き続ける！

この賞を実現させてくれたすべての人に感謝します。応募作品に携わってください皆さん、ありがとうございました。

あらすじ

京都の芸大で油絵を学ぶ中国人留学生の顔生は、言語や文化の隔たりから孤独感に苛まれる日々を過ごしている。社会との繋がりを失った先輩の惨劇を目撃してから、顔生は人を喰う大蛇の幻視に悩まされていた。救いを求めるため訪れた三十三間堂。そこにある千手観音の森の前で、顔生はモネの絵を思わせる睡蓮の池のなかに立っている。一尊の顔が見えない千手観音の幻影を見た。ある時、大蛇と再会し、途方もない恐怖に襲われた顔生の前に現れたのは、白無地のお面を被った一人の男だった——人や社会との繋がりを切望する青年の繊細な心の機微と、自己を見つめ孤独を克服していく過程を描いた幻想小説。

作品の一部抜粋

モネが描いた睡蓮の池のなかに、一尊の千手観音は立っている。それを見ている僕は、自分が無限の時間にある特別な一瞬を見ている気がする。

何度も、何度も。あの伽藍の金堂に何度も、僕は目覚める。皮膚に浸透する木の床の冷たさと、入り口から迷い込むそよ風を感じながら。

金堂には仏像が置かれていない。人影さえも見当たらない。空っぽの古い木造建物だが、なぜかそのなかに横になっている僕がいる。ただ、瞳に映るある光景を、夢中で見ている。緑。金堂の門の向こうに、僕の視線の先に、緑の池が広がっている。光を湛える緑の池に咲いているのは、散りばめる睡蓮の白い花たち。三分咲き、五分咲き、満開。それぞれの顔で、それぞれの表情で。夢幻に且つ魅惑に、かれらは水面に浮かんでいる。だから感じられる。その姿を。その色彩を。その、生きている睡蓮たちの氣息を。

陽射しに寶石のように輝く睡蓮たちの上、柳の木々の隣に、その光景を総括するような、緑色の太鼓橋が架かっている。そして太鼓橋も僕の記憶の断片を繋いでいく。ああ、この景色を、僕は知っているんだ。フランスの印象派画家モネが描いた、睡蓮の池の景色。

あの油絵に存在する風景はなぜか今、この神秘的な伽藍で広がっている。命の拍動を獲得している。そう、モネの絵の中の睡蓮の池が今、僕の目の前に生きているんだ。

ただ一つ、記憶とすれ違う存在に僕は気づいた。太鼓橋のその先、睡蓮の池の一番の奥に何かがある。それを確かめようとした瞬間、ゴーンと、梵鐘が鳴る。その聖なる音が、僕の心臓の鼓動と響き合う。池の奥に在るのは、一体何だろう。身体はどこから湧き上がる切迫の心情のせいなのか、ついに呼吸さえも荒くなる。

少しずつ、輪郭が見えた。異なる方位に向かって伸びていく、無数の手の輪郭。銀色の輝きに染められ、極める美しい何かが堂々と立っている。

——ゴーン。

伽藍に響き渡るのは、二回目の鐘音。ようやく僕は確信した。一尊の銀色の光輝く千手観音が静寂な緑の池の水面に立っていることを。

その千手観音の存在があまりにも不思議で、身体が動かない僕はそのまま惹かれていく。緑の池を越え、銀色の光の源へ、忘我まで眺めている。

綺麗な身体の輪郭から神々しい魅力が伝わってくる。一つ一つの繊細な手のひらにさえ、白蓮華、紅蓮華、青蓮華、紫蓮華、その花々が咲いている。ただ、千手観音の顔だけが神聖な光に隠れていて、僕の視覚が捉えない存在になっている。それでも、池の奥に向かっていて、僕の想像の矢が止まらない。千手観音は、どのような顔立ちなのか。どんな眼光を放っているのか。ここにいる僕のことを、気づいてくれるのか。

嗚呼。一度でもいい。その尊容を僕の両目で、観てみたい。たとえ一瞬でもその横顔だけを覗ければ。それでいい。

それでいいんだと、僕は囁く。

こうして願っているうちに、ゴーンと、三回目の鐘音は僕の身体を力強く貫通した。すべての景色は一瞬で眩しい稲妻に打たれたように、光の海に飲み込まれ、そのまま湮滅に向かう。僕という存在も含めて。

次の瞬間、ようやく僕の意識は人の世に還った。

作者プロフィール

林 柏和(りん かしわ) リベンネーム

一九九四年、中国生まれ。東京都在住。

明治大学大学院文学研究科在学中。

個人文芸サークル「縹ノ森」で文学フリマ

東京・大阪を中心に活動中。



受賞コメント

昔は小さな町に住んでいた、空想好きな子供でした。大人になっても、僕はどのようなでもない夢想家のままで。名も無き勢いに乗って、僕は幻想の物語を描き続けています。いつかこの言葉の編み物は僕と誰かの間の架け橋になるといいなと、こっそり願っています。母語の形ではなくても、この物語を紡ぐ言葉は僕の身体と繋がっている、僕の夢想そのものです。

まだまだ未熟な僕の物語に、京都文学賞は居場所を与えてくれました。無限の言葉の海に現れた、僕だけの一輪の睡蓮の花はようやく咲き誇るようになりました。京都文学賞に携わったすべての方々に、僕の最大の感謝を心から申し上げます。本当に、ありがとうございます。おかげさまで、夢を描き続けるためのちからと、夢を追い続けるためのつばさを、僕は手に入れました。新しい世界へ、僕は今、旅立つのです。